

24年センター試験 ビジュアルデータ分析

24年センター試験“基幹3教科”平均点合計(600点満点)

「国語+数学(I・A+II・B)+英語」は、 10.0点アップの358.0点(得点率59.7%)!

国語6.7点、数学I・A4.0点アップ、英語前年並み/数学II・B1.3点ダウン。
新設「倫理、政治・経済」は67.1点の高得点。公民の受験者は前年より約8.3万人、25%の大幅減。「地歴B」2科目受験は約1.5万人、8.5%に留まる。

旺文社 教育情報センター 24年2月

24年センター試験は志願者55万5,537人(前年比0.6%減)、受験者52万6,311人(同0.3%減)で、ともに4年ぶりの減少である。

24年から地理歴史(以下、地歴)、公民、理科の科目選択の弾力化を図るため、地歴と公民の試験枠を統合([地歴・公民])し、理科も1つの試験枠に統合、それぞれ最大2科目選択を可能とした。しかし、[地歴・公民]試験枠における問題冊子の配付ミス等で多大な混乱を招いた。

大学入試センターからこのほど発表された実施結果によると、国公立大の文系・理系に共通の「国語、数学(2科目)、英語」の“基幹3教科”の平均点合計(600点満点)は、前年より10.0点アップの358.0点(得点率59.7%)だった。過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

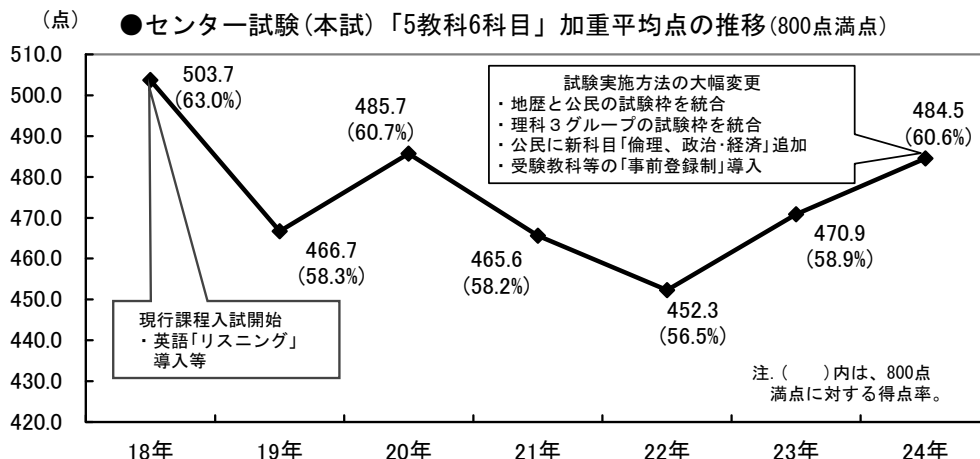
■基幹3教科の平均点

◎ 24年センター試験(以下、セ試)から地歴、公民、理科における試験枠の変更に伴い、各科目の得点には「第1解答」と「第2解答」の得点が混在するため、各科目の平均点の実態が従前に比べ把握しにくい。そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を算出。

大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した“基幹3教科”平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

国語+数学(数学I・A+数学II・B)+英語 = 358.0点(前年差:+10.0点、得点率59.7%)

なお、国公立大受験の動向をみる参考に算出した、文・理系型共通の“5教科6科目”の各加重平均の合計(800点満点)は、484.5点(前年差+13.7点、得点率60.6%)だった。



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数から算出。国語(200点満点)の平均点、及び地歴と公民を合せて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)、数学①の加重平均点(100点満点)、数学②の加重平均点(100点満点)、理科の加重平均点(100点満点)、外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。

なお、18年は理科の新課程(現行課程)出題に伴う「経過措置」科目(旧課程科目)を含む。

平成24年度 大学入試センター試験 平均点等一覧 (確定)

＜平成24年2月2日 大学入試センター発表＞

教科	科目	平成24年(確定)		平成23年(確定)		平均点 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点		
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		- (得点率)	358.0 59.7%	- (得点率)	348.1 58.0%	10.0	
国語(200点)	国語	502,525	118.0	505,214	111.3	6.7	
地理歴史・公民	地理歴史 (100点)	世界史A	1,701	43.6	2,092	48.4	▲ 4.8
		世界史B	91,139	60.9	88,303	61.5	▲ 0.5
		日本史A	3,302	48.7	4,622	52.0	▲ 3.3
		日本史B	157,372	67.9	152,970	64.1	3.8
		地理A	2,695	47.4	5,341	52.6	▲ 5.2
	地理B	132,528	62.2	113,769	66.4	▲ 4.2	
	公民 (100点)	現代社会	105,570	52.1	177,843	61.8	▲ 9.7
		倫理	35,537	69.0	58,278	69.4	▲ 0.4
		政治・経済	57,224	58.0	88,758	59.0	▲ 1.0
		倫理、政治・経済	49,601	67.1	-	-	-
数学	数学① (100点)	数学Ⅰ	7,186	40.2	8,614	44.1	▲ 4.0
		数学Ⅰ・数学A	384,818	70.0	377,714	66.0	4.0
	数学② (100点)	数学Ⅱ	6,917	26.0	7,185	31.7	▲ 5.7
		数学Ⅱ・数学B	349,438	51.2	340,620	52.5	▲ 1.3
		工業数理基礎	42	35.6	60	42.9	▲ 7.2
		簿記・会計	1,288	45.6	1,372	50.9	▲ 5.3
		情報関係基礎	651	56.9	650	63.5	▲ 6.6
理科 (100点)	理科総合A	15,270	67.9	37,109	55.6	12.3	
	理科総合B	20,365	60.4	20,160	54.6	5.8	
	物理Ⅰ	152,853	68.0	152,627	64.1	4.0	
	化学Ⅰ	223,669	65.1	213,757	56.6	8.6	
	生物Ⅰ	189,214	64.0	190,693	63.4	0.6	
	地学Ⅰ	18,347	69.5	25,231	64.3	5.2	
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	519,867	124.2	519,538	122.8	1.4
		リスニング(50点)	514,748	24.6	513,817	25.2	▲ 0.6
		筆+リ(200点換算)	-	119.0	-	118.4	0.6
	ドイツ語	125	144.1	132	142.2	1.9	
	フランス語	142	131.7	151	142.4	▲ 10.7	
	中国語	389	154.1	392	134.1	19.9	
	韓国語	151	146.4	163	149.9	▲ 3.5	

＜注＞

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「24年－23年」と一致しない場合もある。
▲印はダウンを示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科(各Ⅰ科目間)における得点調整は、「倫理」－「現代社会」の16.9点が最大で、実施されなかった。

主な科目の平均点アップ・ダウン & 受験者増・減

＜平均点アップの主な科目＞

化学Ⅰ(+8.6点、4.6%増)／国語(+6.7点、0.5%減)／地学Ⅰ(+5.2点、27.3%減)／数学Ⅰ・A(+4.0点、1.9%増)／物理Ⅰ(+4.0点、0.1%増)／日本史B(+3.8点、2.9%増)／英語(+0.6点＜筆記＋リスニング＞、筆記：0.1%増)／生物Ⅰ(+0.6点、0.8%減)など。

＜平均点ダウンの主な科目＞

現代社会(-9.7点、40.6%減)／地理B(-4.2点、16.5%増)／数学Ⅱ・B(-1.3点、2.6%増)／政治・経済(-1.0点、35.5%減)／世界史B(-0.5点、3.2%増)／倫理(-0.4点、39.0%減)など。

注. ① 新科目「倫理、政治・経済」は67.1点、受験者49,601人。

② ()内の前記数値は平均点の対前年差、後記の数値は受験者数の対前年比増減。

■英語;筆記+1.4点、リスニング-0.6点で、「筆記+リスニング」は0.6点アップ!

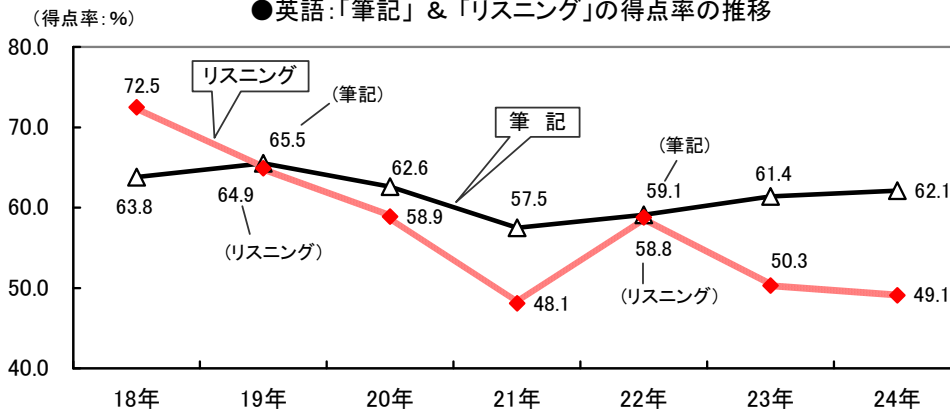
◎ 24年の英語の平均点は筆記の1.4点アップに対し、リスニングが0.6点ダウンし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点到に圧縮換算)としてはほぼ前年並みの0.6点アップの119.0点だった。

平成2(1990)年の七試開始から24年までの英語の平均点(2年~17年までは筆記のみ、18年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6年にこれまで最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復を果たし、得点率はほぼ5割台半ば~6割台半ばを推移している。最近では、21年112.2点(得点率56.1%)→22年118.0点(同59.0%)→23年118.4点(同59.2%)→24年119.0点(同59.5%)と、上昇傾向にある。

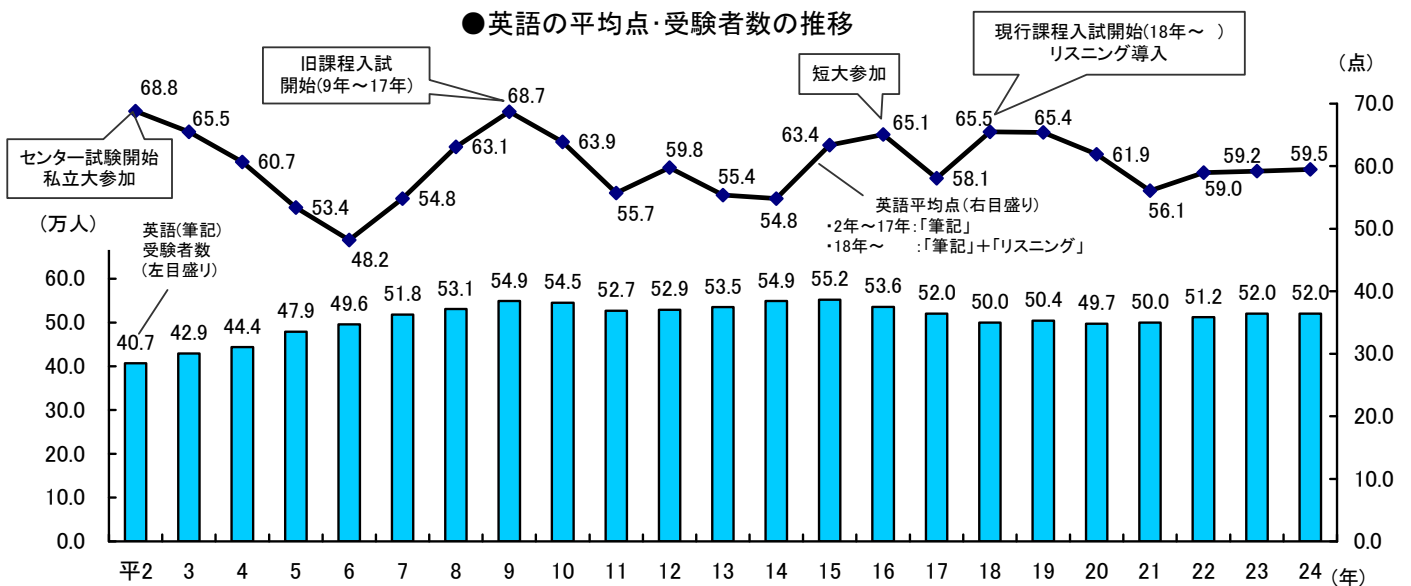
◎ 最近の筆記は、21年に115.0点(200点満点、得点率57.5%)と6割を割った後、22年118.1点(同59.1%)→23年122.8点(同61.4%)→24年124.2点(同62.1%)と、上昇傾向が続いている。

一方、リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、19年32.5点(同64.9%)→20年29.5点(同58.9%)→21年24.0点(同48.1%)と、3年連続ダウン。22年は29.4点(同58.8%)で上昇に転じたものの、23年25.2点(同50.3%)→24年24.6点(同49.1%)と、2年連続ダウンの低下傾向にある。

●英語:「筆記」&「リスニング」の得点率の推移



●英語の平均点・受験者数の推移



注. ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点到に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点到に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■国語;2年連続の平均点アップで、得点率は“6割直前”まで回復！

◎ 英語に次いで受験者の多い国語(24年受験者約50万3,000人)について、前回の旧課程入試の始まった9年から24年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

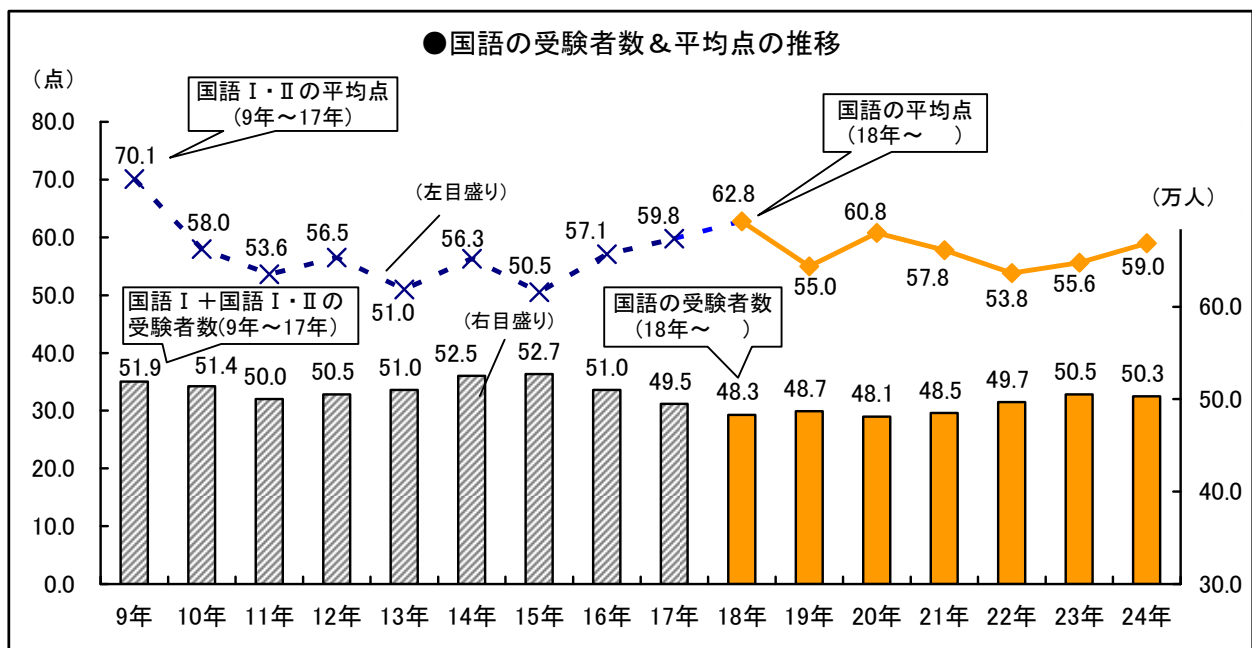
◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落した。20年は一転して大幅にアップし、平均点は2年ぶりに60点台に戻った。

21年は再びダウンして平均点は50点台後半となり、さらに22年には、15年の50.5点に次ぐ現行課程に入ってこれまで最低の得点となる53.8点までダウンした。

◎ 最近では、22年の平均点をボトムとして23年55.6点→24年59.0点と、2年連続アップ。得点率“6割直前”まで回復している。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**；数学Ⅰ・Aは4.0点アップで70.0点の高得点。数学Ⅱ・Bは-1.3点で51.2点。
数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの得点差、18.8点に拡大！

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人を超える受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、24年までの23年に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点である。

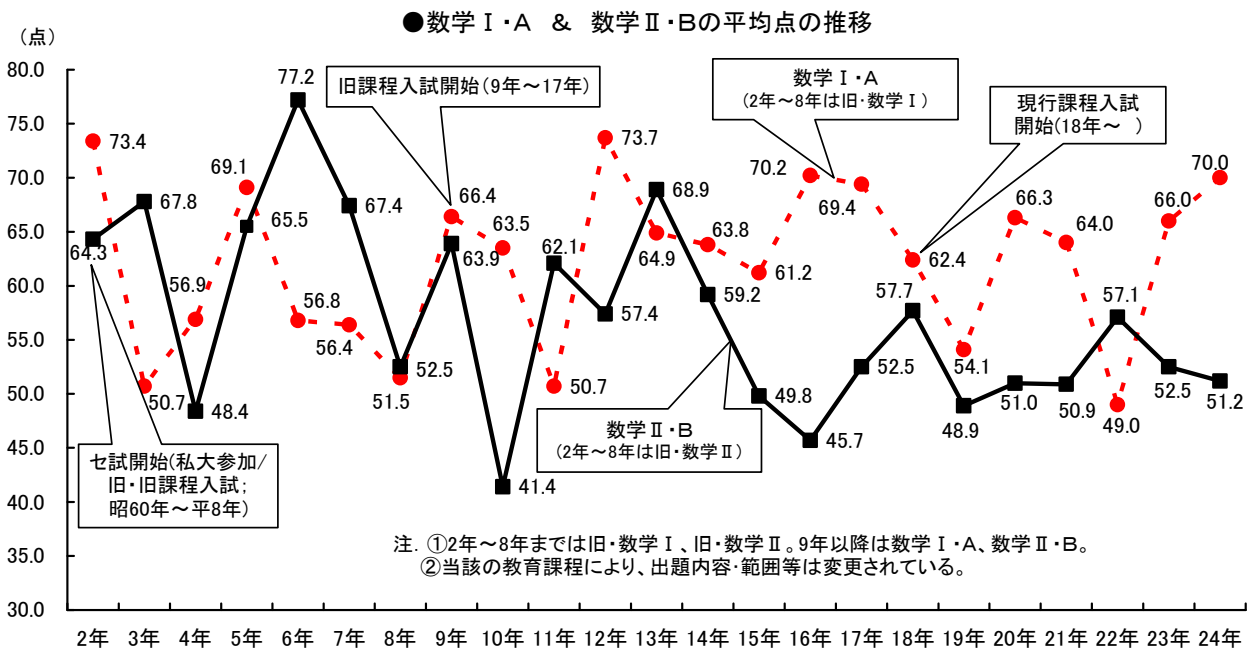
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は24年も含め、過去23回の試験(本試)で50点未満が5回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示しているとみられる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22年にこれまで唯一の50%割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを8.1点下回った。しかし、23年66.0点→24年70.0点とV字回復を果たしている。

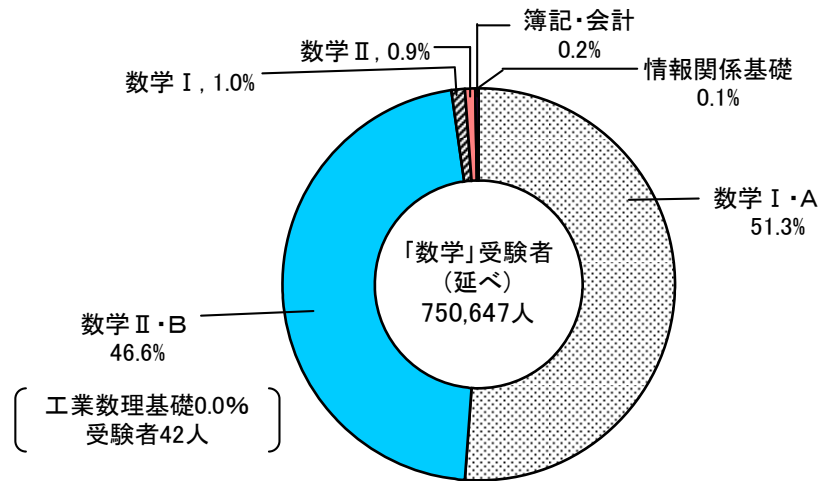
一方、数学Ⅱ・Bは、22年に57.1点で数学Ⅰ・Aを8.1点上回ったものの、23年52.5点→24年51.2点と2年連続でダウンしている。

その結果、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は、23年13.5点差(数学Ⅰ・A>数学Ⅱ・B)→24年18.8点差(同)と、拡大している。

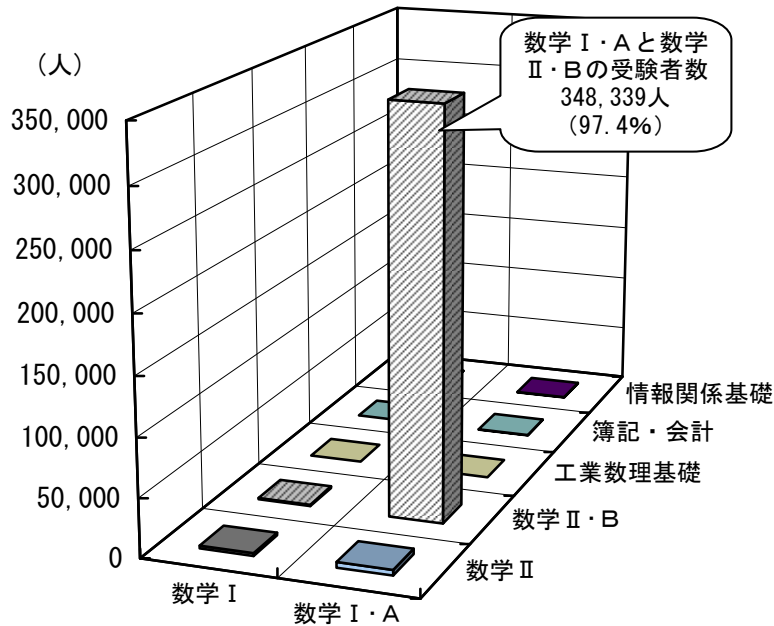


□数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」で約34万8,000人(2科目受験者の97.4%)

●「数学」延べ受験者の構成比（追・再試験含む）



●数学2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



●「数学」2科目受験者：357,789人の内訳

数 学	数 学 ②				
	数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	工業数理基礎 (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)
① 数学Ⅰ	2,279 (0.6%)	1,198 (0.3%)	4 (0.0%)	272 (0.1%)	77 (0.0%)
① 数学Ⅰ・A	4,611 (1.3%)	348,339 (97.4%)	36 (0.0%)	485 (0.1%)	488 (0.1%)

注. ()内は、「数学」2科目受験者に占める割合。

**■地歴・公民;地歴と公民の試験枠を統合 → 10 科目から最大 2 科目選択可能に。
公民の受験者約 8 万 3,000 人(25.4%)の大幅減!**

□ 試験枠の統合等と受験者の動き

◎ 「公民」受験のこれまでの経緯

国公立大の文・理系とも「5 教科 6 科目」(地歴・公民から 1 科目)が主流であった時代、公民は所謂“公民保険”として“地歴・公民ダブル受験”の傾向がみられ、公民受験者は 9 年の 13 万人台から 11 年の 26 万人台へと 2 年間で倍増した。さらに、16 年には、本格化した国公立大文系の「6 教科 7 科目」(地歴 1 科目、公民 1 科目)によって、公民は文系標準型の“必須教科”となり、公民受験者はこれまで最高の 33 万人超えを記録した。

その後は、公民受験の半数以上を占める現代社会の平均点ダウンや低得点などの影響から、主に国公立大理系志望者による現代社会の敬遠がみられ、公民の受験者は 31 万～32 万人台で推移してきた。

◎ 試験枠の統合

これまで地歴と公民は別々の試験枠で、地歴は日本史、世界史、地理(各 A・B 科目)の 6 科目から 1 科目選択、公民は現代社会、倫理、政治・経済の 3 科目から 1 科目選択で実施されてきた。そのため、日本史 B と世界史 B / 世界史 B と地理 B など、地歴の 2 科目選択はできなかった。また、公民の出題科目は全て 2 単位科目からの出題となっていた。

そこで、24 年セ試から地歴と公民の試験枠を統合し、さらに公民に 4 単位科目の「倫理、政治・経済」(以下、倫政経)を新設。これにより、[地歴・公民]([])は試験枠を示す。以下、同)の 10 科目から最大 2 科目の選択が可能となった。

① 公民の受験者約 8 万 3,000 人(25.4%)の大幅減!

24 年は、理系志望者による“公民保険”のさらなる減少などから、公民の実受験者は前年より 8 万 2,694 人(前年比 25.4%)の大幅減となる 24 万 2,363 人だった。全受験者(52 万 6,311 人)に対する「教科選択率」も前年の 61.6%から 46.0%に大幅ダウンした。

特に現代社会は 7 万 2,273 人(同 40.6%)の大幅減で、10 万 5,570 人である。現代社会はこれまで理系志望者の“公民保険”の代表格であったが、国立大を中心にした「第 1 解答科目」(後述)の成績利用によって、より広範な出願が可能な地歴の地理 B などを“本命”科目(第 1 解答科目)とする理系志望者が多かったとみられる。こうした動きが、公民や現代社会の大幅減、地理 B の大幅増(前年より 1 万 8,759 人、16.5%増)につながったようだ。

因みに、地歴の実受験者は前年より 6,058 人(前年比 1.6%)増の 37 万 3,351 人で、「教科選択率」は 70.9%(前年 69.6%)だった。

② 新科目「倫理、政治・経済」への移行!

公民に倫政経が新設され、国立難関大や医学科などでの利用が主体となっている。

24 年は既存科目の倫理が前年より 2 万 2,741 人(前年比 39.0%)、政治・経済が 3 万 1,534 人(同 35.5%)のそれぞれ大幅減となり、両科目を合せると約 5 万 4,000 人減少した。

一方、倫政経の受験者は 4 万 9,601 人であることから、これまで公民を受験していた理系の国立難関大志望者層の多くは、新科目の倫政経へ流れたものとみられる。

倫政経の平均点は 67.1 点と、公民では倫理(平均点 69.0 点)に次ぐ高得点で国立難関大志望者層の受験が伺え、9.7 点の大幅ダウンとなった現代社会(同 52.1 点)とは対照的である。

ところで、倫政経は公民の“4 単位科目”として、その出題内容や出題レベルが注目されていた。設問内容は全て既存科目の倫理及び政治・経済と共通で、出題分野の偏りはなく、配点は倫理の分野 50 点、政治・経済の分野 50 点であった。

◎「第 1 解答科目」と「第 2 解答科目」

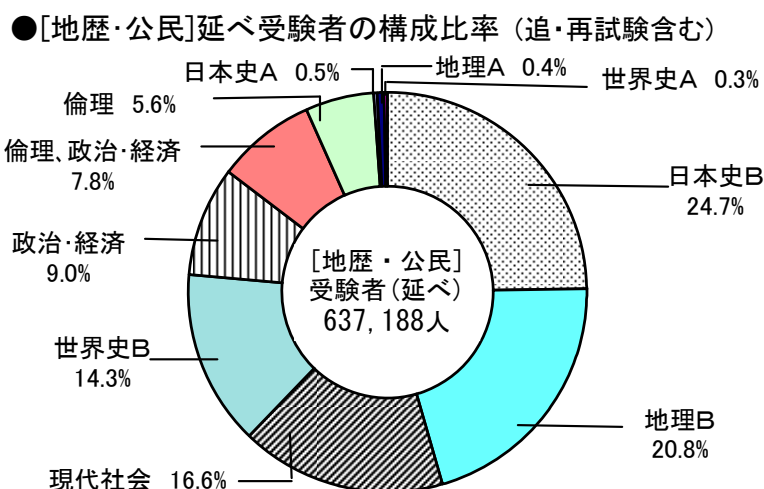
24 年セ試から従来の地歴、公民、及び理科 3 グループの試験枠を[地歴・公民]と[理科]にそれぞれ改変して各試験枠から最大 2 科目の選択・受験を可能とした。

[地歴・公民]及び[理科]で「2 科目選択・受験」の場合、最初に解答する科目を「第 1 解答科目」、次に解答する科目を「第 2 解答科目」としている。

解答時間は各科目 60 分であるが、第 1 と第 2 の間に 10 分間の答案回収(第 1 解答)と解答用紙配付(第 2 解答)を行うため、試験時間は“130 分のぶち抜き”となる。

志望大学のセ試利用が“1 科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命 1 科目”に絞って「2 科目選択・受験」(2 科目試験枠)を「事前登録」(24 年から導入)し、“本命 1 科目”の解答に最大 2 倍近い解答時間(120 分程)を掛けることが可能になる。つまり、2 科目受験の場合の解答科目の順番は受験者に任されることから、2 科目受験者は「第 1 解答科目」の解答時間(60 分)を、「第 2 解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした解答時間の“不公平”を是正する観点から、大学入試センターでは「2 科目選択・受験」の場合、志願大学への成績提供について、“1 科目利用指定”の場合でも、「第 1 解答科目」「第 2 解答科目」それぞれの得点及び合計点を提供して、合否判定には「第 1 解答科目」の利用を促すなどの是正措置を講じている。また、国公立大でもこうした是正措置を踏まえ、“2 科目試験枠”における受験者が“1 科目利用指定”の学部等に出願した場合、従来の「高得点科目」による合否判定ではなく、「第 1 解答科目」の成績利用に変えている。24 年の国立大ではもともと地歴、公民、理科を課さない 1 校と、「高得点利用」の 1 校を除いた全大学、公立大では半数以上の大学が「第 1 解答科目」利用である。



□ [地歴・公民]“2科目受験”の状況

◎ 統合された試験枠[地歴・公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通りになる。[地歴・公民]2科目の実受験者は、17万9,217人である。なお、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む組合せはできない。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1) 「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約15万8,000人、87.9%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、15万7,612人([地歴・公民]2科目受験者に対する割合87.9%)で、[地歴・公民]2科目受験者の9割近くを占めている。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が15万4,021人(同85.9%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、日本史Bとの組合せが3万1,392人(同17.5%)、地理Bとの組合せが2万5,839人(同14.4%)のほか、日本史Bと政治・経済の組合せが1万7,645人(同9.8%)などとなっている。

①「地歴B科目」×「公民」受験：154,021人(85.9%)の内訳

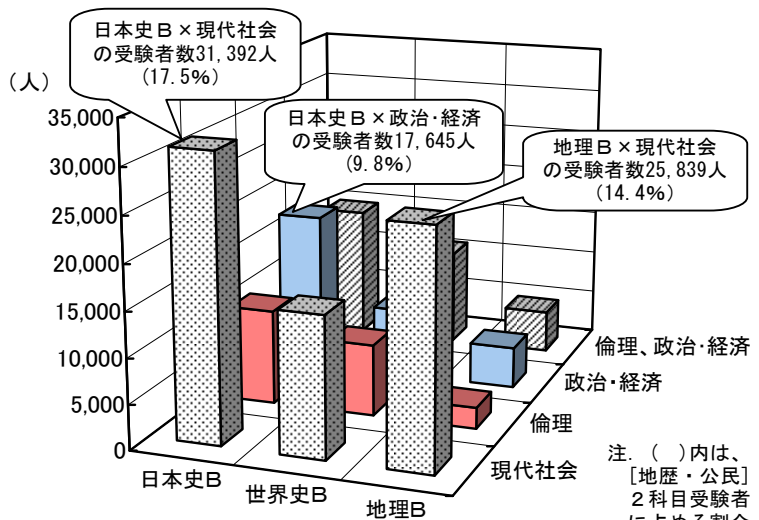
地歴		公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	31,392 (17.5%)	10,546 (5.9%)	17,645 (9.8%)	14,897 (8.3%)
	世界史B	15,520 (8.7%)	7,976 (4.5%)	7,649 (4.3%)	10,880 (6.1%)
歴	地理B	25,839 (14.4%)	2,329 (1.3%)	4,610 (2.6%)	4,738 (2.6%)

②「地歴A科目」×「公民」受験：3,591人(2.0%)の内訳

地歴		公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	817 (0.5%)	208 (0.1%)	464 (0.3%)	37 (0.0%)
	世界史A	398 (0.2%)	146 (0.1%)	171 (0.1%)	24 (0.0%)
歴	地理A	922 (0.5%)	133 (0.1%)	252 (0.1%)	19 (0.0%)

注。()内は、[地歴・公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」×「公民」受験者の内訳 (追・再試験含む)



注。()内は、[地歴・公民]2科目受験者に占める割合。

<問題冊子の配付ミス>

○ 地歴と公民の問題冊子は、それぞれ別冊子になっている。そのため、「地歴1科目+公民1科目」の2科目受験では、地歴と公民の問題冊子を同時に配付しなければならないが、最初に地歴のみを配付し、途中で公民を配付したケースが少なくなかったようだ。

その場合、公民を「第1解答科目」(“本命”科目)としていた受験者は、地歴(受験者にとって「第2解答科目」)を最初に解答せざるを得ず、“不本意な「第2解答科目」”を合否判定に利用されることになる。試験会場によっては、先に配付された地歴の後、遅れて配付された公民の解答に途中から切り替える(解答用紙も「第1解答」用に変更)など、特別の措置も講じられたようだ。

○ こうした[地歴・公民]の試験実施上のトラブルによる「再試験」対象者は、2,930人(1月21日)に及び、このうち212人が再受験した。

(2) 「地歴」 2科目受験：約1万6,000人、8.8%

地歴と公民の試験枠統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が1万5,749人([地歴・公民]2科目受験者に対する割合8.8%)と、期待されたほど多くはなかった。特に「地歴B」科目同士の2科目受験者は、1万5,251人(同8.5%)に留まった。「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが6,766人(同3.8%)、世界史Bと地理Bの組合せが5,796人(同3.2%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが2,689人(同1.5%)となっている

① 「地歴B科目」×「地歴B科目」受験：15,251人(8.5%)の内訳

		地 歴	
		世界史B(人)	地理B(人)
地	日本史B	6,766 (3.8%)	2,689 (1.5%)
	世界史B	—	5,796 (3.2%)

③ 「地歴A・B科目」×「地歴A・B科目」受験：328人(0.2%)の内訳

地 歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目×世界史B	67(0.0%)
	B科目×世界史A	117(0.1%)
世界史	A科目×地理B	49(0.0%)
	B科目×地理A	25(0.0%)
地理	A科目×日本史B	43(0.0%)
	B科目×日本史A	27(0.0%)

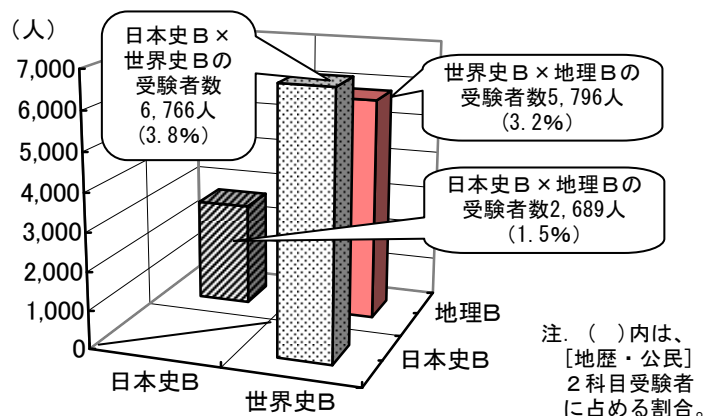
注.()内は、
[地歴・公民]
2科目受験者
に占める割合。

② 「地歴A科目」×「地歴A科目」受験：170人(0.1%)の内訳

		地 歴	
		世界史A(人)	地理A(人)
地	日本史A	77 (0.0%)	42 (0.0%)
	世界史A	—	51 (0.0%)

注.()内は、[地歴・公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」 2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



(3) 「公民」 2 科目受験：約 5,900 人、3.3%

公民同士 2 科目の組合せは 4 通りで、受験者は 5,856 人([地歴・公民]2 科目受験者に対する割合 3.3%)である。

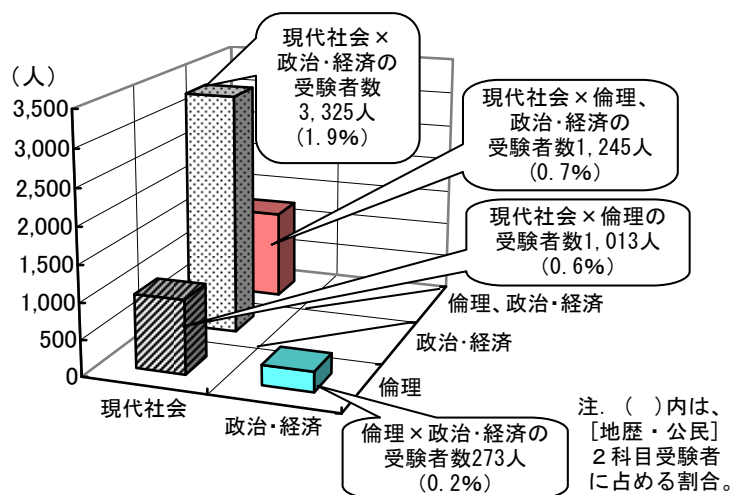
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが 3,325 人(同 1.9%)、倫政経との組合せが 1,245 人(同 0.7%)、倫理との組合せが 1,013 人(同 0.6%)などである。

○「公民」 4 科目から 2 科目受験：5,856 人(3.3%)の内訳

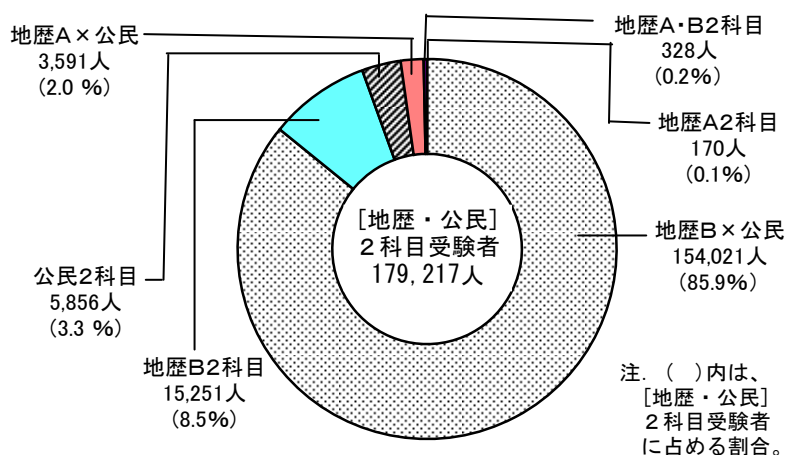
		公 民		
		倫理(人)	政治・経済(人)	倫理、政治・経済(人)
公 民	現代社会	1,013 (0.6%)	3,325 (1.9%)	1,245 (0.7%)
	政治・経済	273 (0.2%)	—	—

注. ()内は、[地歴・公民] 2 科目受験者に占める割合。

●「公民」 2 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



●[地歴・公民]2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



□ [地歴・公民]2科目受験の“激減”！

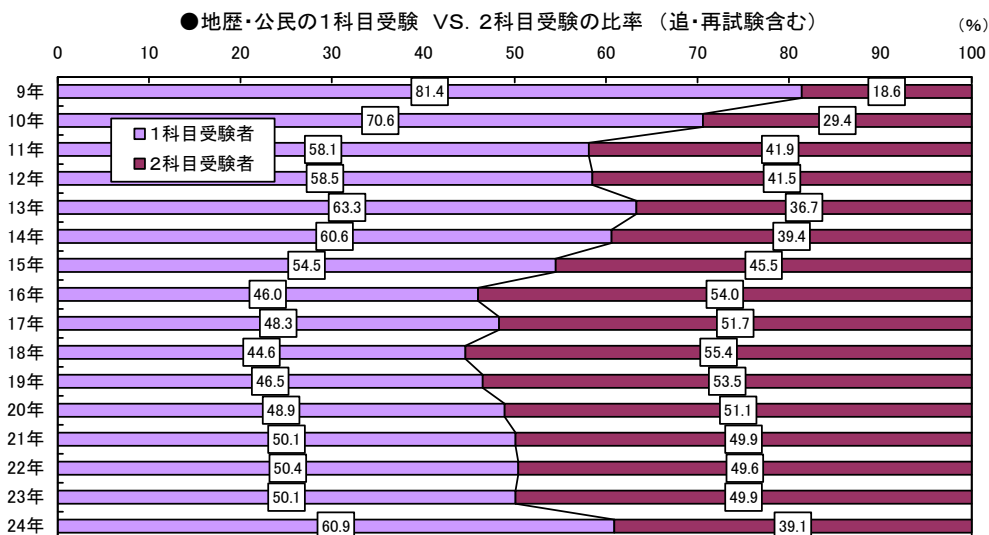
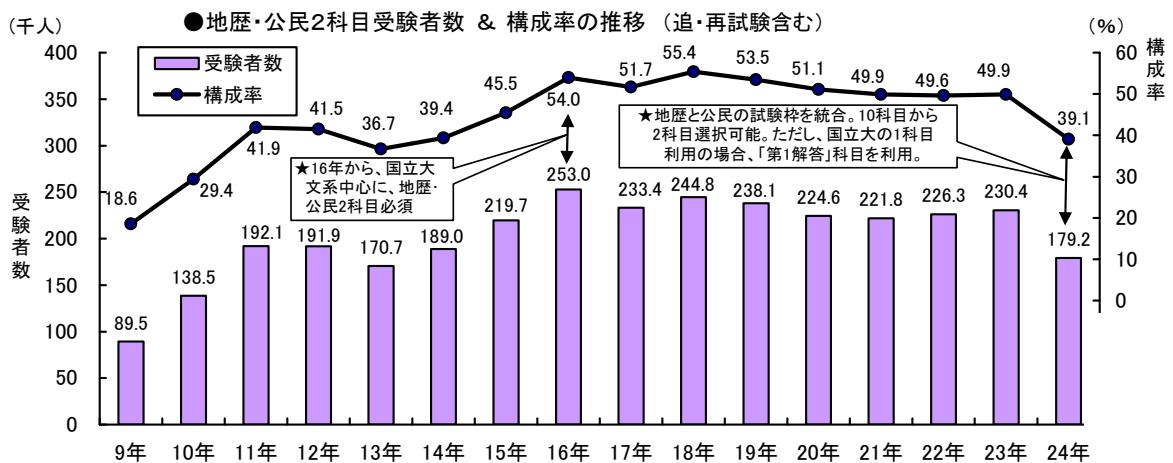
◎ これまでの地歴・公民(試験枠は別)2科目受験は、前述のように「5教科6科目」(地歴・公民から1科目)時代においては、高得点を期待する“公民保険”による傾向が強く、9年～11年までは2科目受験者(実受験者。以下、同)が激増した。16年は、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合(構成率)も初めて50%を超えた。

◎ 新課程(現行課程)入試となった18年は、時間割の変更等で2科目受験者は前年より約1万1,000人(4.9%)増の約24万4,800人。地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%。

19～21年は、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験者の減少、構成率の低下が続いた。22年は2科目受験者増となったが、その構成率は4年連続低下した。

23年は2科目受験者が約4,200人(1.8%)増の約23万400人となり、2年連続の増加。また、2科目受験の構成率も49.9%で、5年ぶりのアップとなった。

◎ 24年は前述のとおり、試験枠の統合、国立大を中心とした1科目指定における2科目受験の成績利用の大転換などから、“公民離れ”が進んだ。その結果、統合された試験枠[地歴・公民](地歴2科目、公民2科目の選択・受験が可能)における2科目受験は、前年より5万1,207人(22.2%)の大幅減となる17万9,217人に激減した。また、[地歴・公民]受験に占める2科目受験者の割合も前年の49.9%から39.1%にダウンした。



■ **理科**;3グループの試験枠を統合 → 6科目から最大2科目選択可能に。

“理系志向”を反映し、受験者約7,000人、1.9%増！

□ **試験枠の統合**

理科も科目選択の弾力化を図るために3グループの試験枠を1つに統合し、6科目から最大2科目の選択ができるようにした。これにより、物理Iと地学I／生物Iと理科総合B／化学Iと理科総合Aといった、それぞれ2科目選択が可能になった。なお、試験枠[理科]における2科目選択の組合せは、全部で15通りになる。

◎ **受験者の動き**

24年の[理科]全体の実受験者は“理系”志向を反映して、前年より7,145人、1.9%増の38万2,629人で、全受験者(52万6,311人)に対する「教科選択率」も前年の71.1%から72.7%にアップしている。

理科の各科目の受験者の動きをみると、理系に必須の物理Iはほぼ前年並み(前年より226人、0.1%増)であるが、化学Iは9,912人(前年比4.6%)増の22万3,669人である。

これに対し、時間割(3グループ制による科目選択の制約)の関係などで、前年まで文系志望者の受験が比較的多かった理科総合A(前年より2万1,839人、58.9%減)と地学I(前年より6,884人、27.3%減)の大幅減が目立つ。

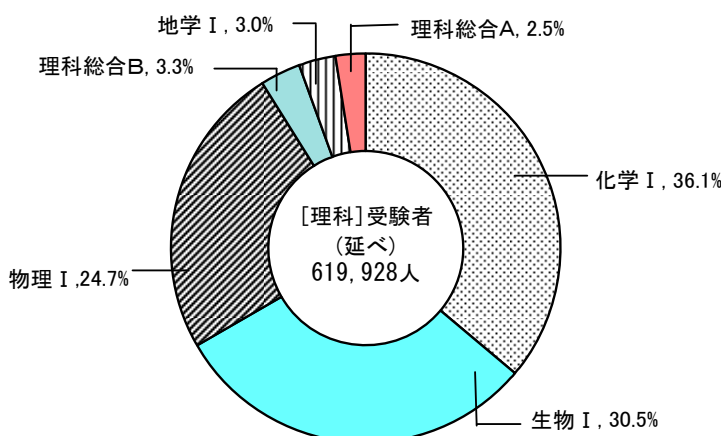
これは従来、文系志望者が高得点利用科目を期待して複数科目を受験していたが、3グループの試験枠が統合されたことと、国立大を中心に「第1解答科目」の成績利用に切り替わったことなどから、より広範な出願要件の確保と高校での履修率(学習の度合い)が地学Iより高い生物Iや化学Iを“本命”科目(第1解答科目)としたことなどによるとみられる。

● **[理科]2科目受験者：237,344人の内訳**

		理 科				
		理科総合B(人)	物理I(人)	化学I(人)	生物I(人)	地学I(人)
理 科	理科総合A	787 (0.3%)	3,231 (1.4%)	2,557 (1.1%)	6,826 (2.9%)	249 (0.1%)
	理科総合B	—	163 (0.1%)	327 (0.1%)	13,732 (5.8%)	3,015 (1.3%)
	物理I	—	—	134,296 (56.6%)	2,305 (1.0%)	524 (0.2%)
	化学I	—	—	—	67,839 (28.6%)	425 (0.2%)
	生物I	—	—	—	—	1,068 (0.4%)

注. ()内は、[理科]2科目受験者に占める割合。

● **[理科]延べ受験者の構成比率 (追・再試験含む)**

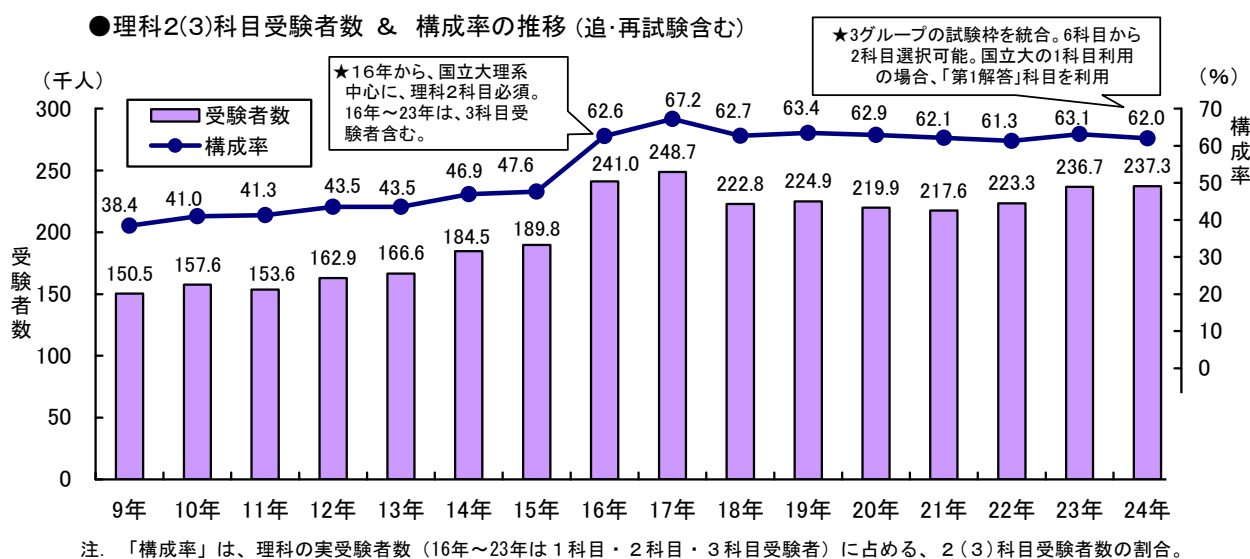


□ [理科]“2科目受験”の状況

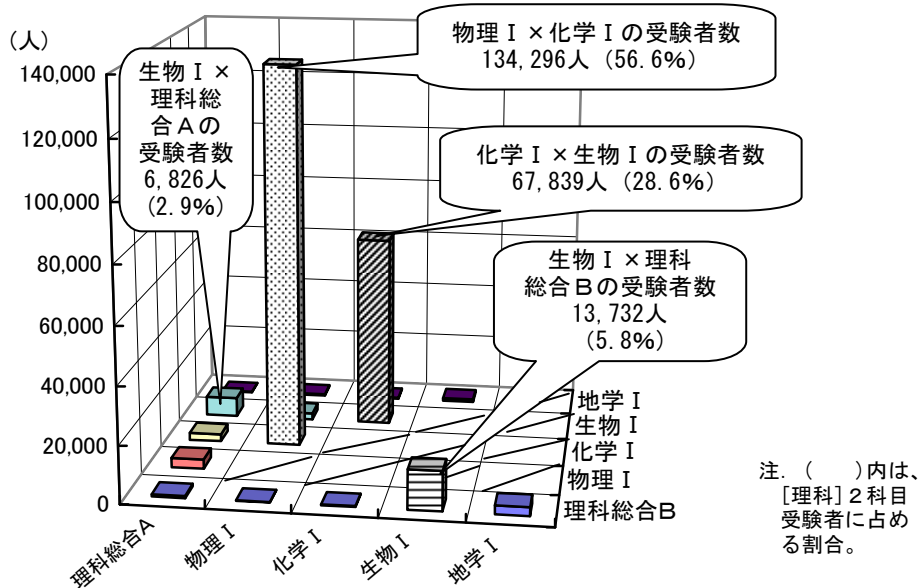
試験枠[理科]における2科目の実受験者は、前年(3科目受験を含む)より603人(0.3%)増の23万7,344人で、前年よりやや増加した。

また、2科目受験の組合せは例年どおり、物理Iと化学Iの組合せが13万4,296人(2科目受験者に対する割合56.6%)で、最も多かった。次いで、化学Iと生物Iの組合せが6万7,839人(同28.6%)であった。

なお、これまで選択・受験ができなかった生物Iと理科総合Bの組合せは、1万3,732人(同5.8%)だった。



●[理科]2科目受験者の内訳(追・再試験含む)

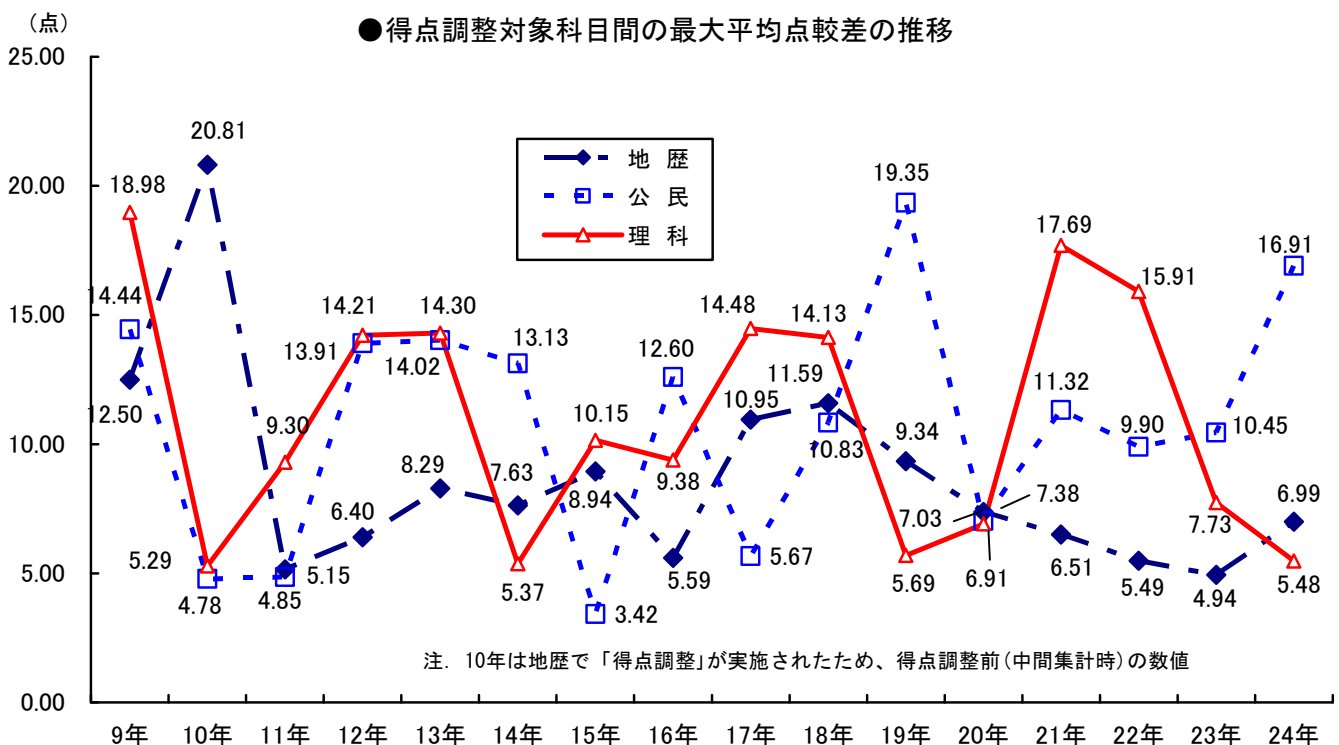


■ **得点調整**; 対象科目間の平均点較差「倫理－現代社会」=16.91 点で、調整なし！

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民(倫政経を除く)の各科目間、及び理科の各<I科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

24年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴；日本史B－世界史B=6.99点、公民；倫理－現代社会=16.91点、理科；地学I－生物I=5.48点で、最大較差の公民でもガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

■ **受験科目数別の受験状況**; 7科目以上の多数科目受験者が約5,800人、1.9%増!

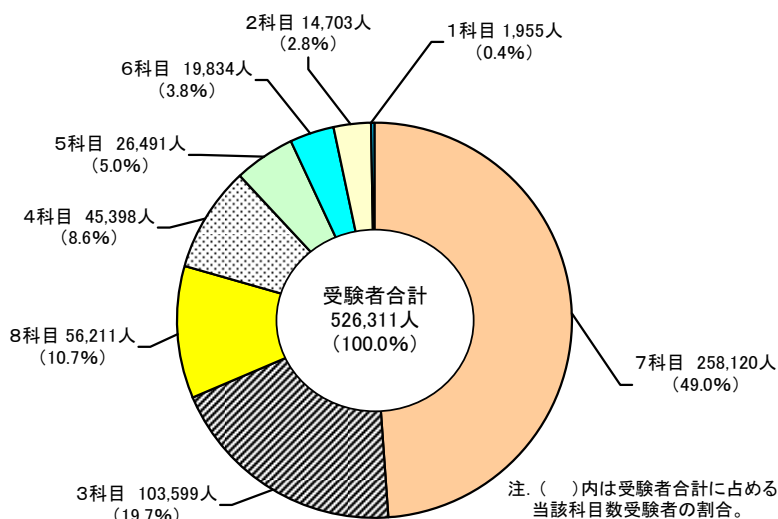
◎ 24年のセ試受験科目数は、理科がこれまでの最大3科目から2科目となったため、最大受験科目数は前年の9科目から8科目に減った。

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の「5(6)教科7科目」化によって「7~9科目」受験が急増し、高い受験率(当該科目数の受験者数÷全受験者数×100)を示している。

◎ 24年は全体の受験者が1,482人(0.3%)減少した中、7・8科目受験者の合計は、前年(7~9科目受験者合計)より5,827人(前年比1.9%)増の31万4,331人だった。

ただ、7科目受験者が6万4,981人(同33.6%)増えた一方で、9科目受験(23年は2万664人)がなくなったことに加え、8科目受験者も3万8,490人(同40.6%)減った。

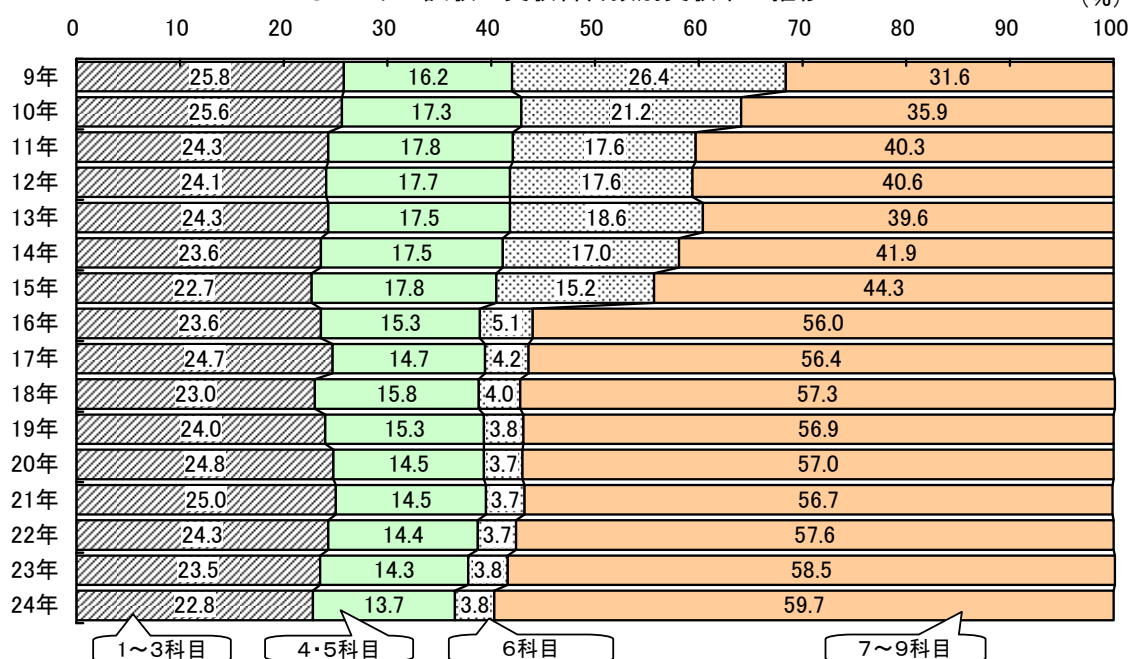
● 24年センター試験 受験科目数別受験者数



* 全体の受験率(全受験者数÷志願者数×100)は19年以降上昇傾向にあり、24年は前年を0.3ポイント上回る94.7%である。
 なお、これまでの最高は、セ試開始時(2年)の94.9%。

注。()内は受験者合計に占める当該科目数受験者の割合。

● センター試験/受験科目数別受験率の推移



注. ① 受験率は、受験者合計に占める当該科目数受験者の割合。
 ② 9科目受験可能は、16年~23年。 ③ 16年から国立大を中心に、5(6)教科7科目。